

敦煌の学士郎について

小川貫弑

今世紀の初頭、道士王円籙によつて発見された甘肅の敦煌遺書は、世界の各地に四散してしまつた。各国の博物館や図書館などに収蔵された敦煌の遺書は数万巻にのぼる龐大な文献であるが、すでに半世紀をへて、漸次その整理もすすみ、書目や解題が公刊され、総合的な取扱ひのできる時期となつた。一九六二年五月、商務印書館編の『敦煌遺書総目』ならびに索引の公刊はそのよき一例である。

敦煌の千仏洞の一室から王道士によつて発見されたことは、実にすばらしい世紀の大発見であるが、それと共になぜ洞窟のなかに莫大な数量にのぼる遺書が保存されていたか。これは興味ぶかい疑問であるが。ただ西夏の兵革のときに、石室を封じたまま、近年に到つたという程度で、その由来はつまびらかでない。この敦煌遺書の内容をみると、内典の経律論三藏とその章疏類がその大部分を占め、これに外典の儒

教の古典や道教の經典、仏寺の出納記録古文書類をふくみ、かなり広範圍にわたるものであるが、しかし六朝末期から北宋初にいたる古写経をその主体とするものである。仏典にしばしばみる藏経印記や敦煌の各仏寺の藏経目錄類、各寺の出納記録・古文書類などからみて西夏の兵乱をさけて莫高窟へ疎開をするとき、かなり組織的に大規模なかたちで蒐集と輸送の事務がとり行なわれたようである。これらのことも、今後さらに究明さるべき点である。

敦煌遺書の中に、古文尚書・毛詩鄭氏注・故訓伝、礼記鄭玄注、春秋穀梁伝集解・春秋左氏伝集解・論語鄭氏注・論語義疏・何晏集解、孝経御注・御注集義、莊子郭璞注など貴重な中国古典とその注疏のあることは、内外の学者のはやくより注目するところである。これらのいわゆる外典が敦煌の千仏洞から発見されたこと、それらが敦煌地方の仏寺の經藏から集團疎開したものであること。敦煌の仏寺において、これらの外典がどのような場で、利用活用されていたのか。これ

らの疑問をとく鍵に、敦煌仏寺における学士郎の存在とその活動が注目されるのである。いまは敦煌の学士郎について、二二三の考察をすゝめたいと思う。

二

莫大な数量にのぼる敦煌遺書のうち、内典にくらべて外典のしめる量はきわめて少い。しかもその題記や奥書からみるとき外典の書写は、晩唐から五代の九世紀後半から十世紀のあいだに集中している。それは沙州敦煌の地を吐蕃が占領した八世紀の後半から九世紀の前半の時代よりも、大中二年（八四八）張議潮が挙兵して河西の地から吐蕃をおいだして唐王朝のもとに、漢人の支配となつた帰義軍の時代、その節度使は張氏から曹氏へと交替をみるが、再びチベット族がおこつて西夏を建国するにいたるまでの期間である。

敦煌の外典の題記にみる筆者の氏名をその肩書とあわせて年代順に列記すれば、次の如くである。括弧のなかの書名と数字はその題記をもつ典籍の所在を示すものである。

帰義軍節度使 張氏時代（八四八—九一四）

学生宋文獻・安文徳 （開蒙要訓 S〇七〇五）

学生宋文顯・安文徳 （太公家教 P二八二五）

学生令孤再晟 （論語集解 P二七一六）

敦煌の学士郎について（小川）

学生判官高莫建 （論語集解 P三四四一）

学生陰惠達 （論語集解 羅氏藏）

学生張文營 （論語集解 P三七四五）

童子令孤文進 （論語集解 P二七一六）

学生劉文端 （敦煌二十詠 P三八七〇）

沙州学□素什徳 （白文孝経 P三三六九）

学生素什徳 （白文孝経 P三三六九）

敦煌帰義軍学士張喜進 （論語集解 P二六八一）

沙州靈図寺上座随軍弟子索庭珍学士張喜進 （論語集解 P二六一八）

張堅堅 （論語集解 P三四三三）

敦煌郡学士張円通 （白文論語 P三七八三）

沙州敦煌学士張□□ （仏経 S四〇五七）

学士呂昌三 （太公家教 S〇四七九）

学郎趙懷通 （新集吉凶書儀 P二六四六）

蓮台寺学士索威建 （太公家教 P三五六九）

州学陰陽子弟呂弁均 （筮書 P二八五九）

学士郎張□□ （太公家教 P三七六四）

学仕郎張盈信 （太公家教 P四五八八）

これら学生・学士・学士郎・学仕郎という肩書をもつ俗人が中国古典の孝経論語の白文と、その集解を書き、開蒙要訓

や太公家教・吉凶書儀など初等教育の教科テキストを書写している。これらの学生学士は、どのような身分と地位の人びとであろうか。

フランスのペリオ教授の敦煌遺書のなかに『無名歌』（P 三六二〇）の末題に

未年三月二十五日 学生張議潮写

というのがある。これは、はじめに『封常清謝死表聞』と『諷諫今上』の二文に、つゞくものであるが、のちに帰義軍節度使となつた張議潮の学生時代の書写になるものであろうか。その真偽仮托の如何は、原本について再検討をまたねばならぬ。張掖出身の張議潮が地方の州学に学生生活をしたころの学習の一端でなからうか。張議潮は大申五年（八五二）帰義軍節度使に任ぜられ、咸通七年（八六六）兄の張議潭の子張淮深に沙州の地をゆだね、翌八年二月長安に入城し、そのまゝ咸通十三年（八七二）長安で世を去つている。張議潮の卒年は詳かでないが、兄の張議潭は七十四歳で長安に歿している。張議潮が未年に学生として書写したときは、憲宗の元和十年（八一五）か、文宗の太和元年（八二七）ごろのことであろう。

唐代の地方学校には、州学や県学があり、そこには経学博士や助教のもとに学生たちがいた。沙州は人口の少ない下州であつたから、博士一人・助教一人に、学生四十人が定員で

あつた。敦煌遺書のなか外典の書写やその学習と誦持をした学生は、沙州敦煌にあつた州学の学生とみるのが至当である。わたくしは唐の義浄の『南海寄帰内法伝』巻三の受戒軌則にみるインドの仏寺における童子と学生の身分を考えて、敦煌の文書にみる童子と学生を検討したが、ついに共通のものを認めることはできなかった。インドの仏寺の中では、在俗の子弟の教育事業がなされ、将来成人したとき沙門を決議して入寺した者を童子とよび、たゞ学習期のみ仏寺に起居して外典などを学習するものを学生とよんでいた。これらのことは、わが国近世の江戸時代に風靡した寺子屋制の源流であるが、晩唐から五代のころの敦煌仏寺に、そのような風習があつたのではないか。この点は解明したい問題点である。

三

帰義軍節度使 曹氏時代 (九一四—一〇三〇)

三界寺学士郎張英俊 (李陵与蘇武書 S〇一七三)

金光明寺学仕郎安友盛 (秦婦吟 S〇六九二)

浄土寺学郎薛安俊・張保達 (目連救母變 S二六一四)

学子薛安俊・信心弟子李吉順

(十二時普勸四衆依教修行 P二〇五四)

金光明寺学郎索富通 (李陵蘇武往還書 P三六九二)

浄土寺(沙)弥趙員住 (茶酒論・秦婦吟 P三九一〇)

永安寺学士郎杜友遂 (燕子賦 S〇二一四)

三界寺学仕郎曹元深 (孝経 S〇七〇七)

学郎李幸思 (李陵蘇武往還書 P二四九八)

学郎員義 (事森 P二六二一)

敦煌那学仕郎張□□ (開蒙要訓 P二五七八)

蓮台寺学郎王和通 (王梵志詩集 P三八三三)

靈囿寺沙弥德栄 (孝経 S七二八)

靈囿寺学郎李再昌 (孝経 S七二八)

永安寺学仕郎高清子 (孝経 S一三八六)

学仕郎陰彦清 (金剛般若経 P三三九八)

海王寺学郎張□保 (孔子項託 S〇三九五)

永寧寺学仕郎如順進 (太公家教 S一六三)

浄土学生趙令全 (毛詩 P二五七〇)

学仕郎守州学博士翟奉達 (具注曆 S〇〇九五)

就家学士郎馬富徳 (秦婦吟 P三七八〇)

浄土寺学仕郎賀安住 (雜抄 P三六四九)

大雲寺学郎 (開蒙要訓 S五四六三)

三界寺沙弥戒輪 (父母恩重経 李氏蔵)

浄土寺学使郎王海潤・鄧保住・薛安俊 (勸戒文 北京蔵)

大雲寺学仕郎鄧慶長 (王梵志詩集 S〇七七八)

顯(徳寺)比丘僧願成俗姓王保全(弁才家教 P二五一五)

懸泉学士郎武保會・判官武保瑞(法華経 北京蔵)

敦煌の学士郎について(小川)

浄土寺学仕郎辛延□・曹願長(社司帖 S二八九四)

顯徳寺学士郎楊願受 (目連救母変 北京蔵)

汜孔目学仕郎陰奴兒 (捉季布伝文 S五四四一)

安參謀学侍郎□□興 (新集嚴父教 S四三〇七)

すでに帰義軍節度使張氏時代の末期に、沙州靈囿寺上座の随軍弟子の索庭珍が写記した『論語集解』巻第一を、乾符三年(八七六)学士の張喜進が念書した識語をのこしている。景福二年(八九三)二月十二日に、蓮台寺学士の索威建が『太公家教』を記録している。これらは在俗の学士たちが敦煌の仏寺、靈囿寺や蓮台寺に居住して教育事業に関係をもつていたことを物語るものである。これが曹議金が帰義軍節度使に就任した後、敦煌仏寺における学士郎の活躍が一般化するのである。この現象を、上掲の記事が示している。

すでに述べたとおり嘗て学生であつた張議潮がのちには吐蕃の勢力を撃退して帰義軍節度使に就任したが、同光三年(九二五)乙酉歳十月□日三界寺学仕郎曹元深が写記した『孝経』が敦煌遺書のなかにある。この曹元深は、張氏にかわつて帰義軍節度使となつた曹議金の子息で、兄の曹元徳について天福八年(九四三)正月節度使に就任するその人である。帰義軍節度使になつた曹議金の子元深が、三界寺学仕郎として『孝経』を書写していることは注目すべき点である。

曹氏節度使時代には、敦煌の諸仏寺に学士郎たちが居住していた。その仏寺は、尼寺ではなく、敦煌の僧寺十二カ寺のうち、三界・金光明・浄土・永安・蓮台・靈園・永寧・大雲・顕徳の諸寺に、および、敦煌県外の懸泉や海王寺にまで学士郎の活動があつたことを知るのである。

学士郎の存在はただ仏寺のみの居住ではなかつた。『秦婦吟』一卷（P三七八〇）の末題には

顕徳二年（九五五）丁巳歳二月十七日就家学士郎

馬富徳書記

とあり、家庭通学の学士郎のあつた事実を示している。さらに注目すべきは、『顕徳三年（九五六）丙辰歳具注日曆』（S〇〇九五）には

学仕郎守州学博士翟奉達纂

と、その沙州の州学博士の翟奉達が学仕郎の肩書をもつていたことである。顕徳六年（九五九）の『具注曆日』（P二六二二三）には、朝議郎檢校尚書工部員外郎沙州経学博士兼殿中侍御史賜緋魚袋翟奉達の撰号がある。沙州の州学の経学博士の翟奉達は亡妻馬氏のために、一七斎から三年齋までに、無常経・水月観音経・咒魅経・天請問経・閻羅経・護諸童子経・多心経・孟蘭盆経・仏母経および善悪因果経を書写して追善供養をなしている（P二〇五五）。帰義軍節度使曹氏の参謀となり、沙州の州学博士であつた翟奉達の肩書に学仕郎とあるの

は、どのような社会的意義をもつものであるうか。

沙州敦煌地方の文教政策の最高長官である州学博士の翟奉達に、学仕郎の肩書のあるのは、敦煌の諸仏寺にいた学士郎とどのような関係にあつたであろうか。仏寺の学士郎たちを取締るほどの一段高い社会的地位が沙州の経学博士であつたのではないか。この間の事情が詳かでないのは遺憾である。

四

唐の武宗による会昌年間の廃仏毀釈は、武宗の崩御と宣宗の即位によつて終止符をうち、仏教復興となつた。とき恰も沙州敦煌の地方は漢人出身の張議潮によつて吐蕃の勢力を駆逐して、再び唐王朝の国威を復興することとなつた。この復旧の機運に乗じて、沙州の地は郷里制の復活、戸口調査、仏寺機構の改革となつたが、これと共に教育事業の上にも州学の復興をみたことは注意すべき点である。

張議潮が帰義軍節度使に就任したとき、沙州の州学の経学博士となつた人は、敦煌管内釈門都監察僧正の僧慧苑であつた。破仏事件直後の仏教復興の期に、儒仏二教の権威者の僧正慧苑が沙州の州学博士であつたことは今後の敦煌地方の文教政策の上に儒仏二教融和の趨勢をもたらしたのではないか。やがて敦煌の仏寺に学士や学士郎が多く居住し、長老がその教育事業にたづさわつたことは、上掲の古典の題記が物

語るとおりである。仏寺における学士郎の活躍が、儒仏二教の協調と融和をもたらすばかりでなく、中国の古典を学び仏教の思想と信仰を民衆のあいだにまで普及し、社会的に文化の向上に大きな役割をはたしている。敦煌の晩唐五代にかけて俗語体の通俗文学書の発達、変相と変文の普及に、仏寺における学士郎の功績は決して少なくないと思う。

先年、竺沙雅章氏の敦煌の寺戸や僧官制度の研究によつて、帰義軍時代にみるべき特色を発輝したことが仏教々団の上にも認められてきた。

仏経（S〇五四二）の紙背には、金光明寺羊抄、堅意申請処分尼光頭状、普光寺状、大乘寺羊口、靈修寺羊口、敦煌各寺僧尼簿録など五通が連貼されている。敦煌仏寺所有の羊頭数の報告書には、執筆者のところに寺卿の俗人氏名が認められる。寺卿は僧寺にも設置されていたが、文書では敦煌の尼寺にかぎつて登場する全くの俗人である。これは吐蕃統治下の漢人として、官役にもかりだされ、官營の写経場の経費を負担し、さらに社邑を組織するものであつた。その選出の方法は知る由もないが、家庭人とすれば、かなり上層部の人が寺卿に選ばれていたと紹介されている。

吐蕃時代の尼寺の寺卿に対比すべきものが、帰義軍時代の僧寺の学士郎の活躍である。仏寺の学士郎は敦煌の五尼寺には認められない。十二僧寺のうち、その八九寺までに寺名を

冠した学士郎の氏名が散見できる。それは敦煌県東の懸泉にも、学士郎のいたことが判る。寺務の処理やその書類記録などにむかない尼寺の僧職を補佐する寺卿が一切の寺務を代行したが、仏寺の学士郎はそれらの寺務や寺職の補佐をするものではなかつた。学士郎は僧寺にあつて、童子・行者・沙弥らと共に中国古典の講読や詩文・書儀の学習と教育をうけて、自ら教科書や参考書の書写をなし、ときには仏寺の社友として社司転帖などを書くこともあり、仏経を所持して仏教信仰を深めるものもいた。いわゆる寺子屋の寺子である。

帰義軍節度使の時代を迎えて沙州敦煌地方の文教政策は、僧正慧苑が州学博士であつたところから儒仏二教融和の風潮をもつて出発した。それが節度使が張氏から曹氏に交替しても、さらにその線にそつて進展して敦煌の三界寺・金光明寺・浄土寺・永安寺・蓮台寺・靈圖寺・永寧寺・大雲寺・顯徳寺、さらに海王寺や懸泉にまで学士郎が居住して、その教育活動となつた。このことが敦煌遺書のなかに古典注疏などの外典の資料がかなり沢山包含される所以であらう。このことが晩唐から五代にかけて敦煌遺書のなかに儒仏二教にわたる通俗文学書、変文の発達し存在する一理由でもあらう。敦煌遺書にしめる外典の存在は、直接・間接に仏寺の学士郎の活躍を考慮し、それらの遺産として高く評価すべきものである。（一九七二・九・三〇稿）